

## 只見町の昔話

只見町には様々な民俗が今なお息づいており、素晴らしい文化を形作っています。昔話もその一つです。昔話は、「昔あるところに」といった出だしで語られるところからそう呼ばれるようになったものです。

ところで一般に昔話は、場所が特定されず、どこにでもある話であるために、他愛無い話とされ、人々の関心を引き付けることがあまりありませんでした。そのため昔話は、記録されることなく、また、関心も寄せられないことなく衰退しつつあります。

このような昔話を取巻く状況にあつて只見町の場合は、昔話が伝承され、今なお語りべがいることに特色があります。

私は「只見町昔ばなしの会」会員の語りを何度か伺う機会がありました。昔話を、それも親や年寄りなどから聞いた話を語る語りべの多さに驚いた次第です。それはつい最近まで昔話が生活の中で語られていたことを物語るものでした。昔話をお年寄りなどから聞いて育った会員の方々は、昔話をすっかり暗

記してしまっていたのです。改めて会員として何かを語るといった時に、思い浮かんだのが頭の中に刻み込まれた昔話だったのかと思われれます。



「昔ばなしを語る夕二ばあちゃん」

只見町の場合もそうですが、昔話が語られるのは、季節的には冬が多く、時間的には夜に集中したものです。雪の多い只見町では、冬は屋外での作業も少なくなり、勢い屋内で過ごす時間が長くなります。また、子

供たちも外での遊びが少なくなり家の中に閉じこもりがちになります。長い冬の夜は、薪が燃え盛る暖かなユルリの回りに家族が集ります。この時に昔話が語られました。

もつとも、誰もが昔話が得意であるとは限りませんので、子供たちは昔話が得意な年寄りの家を集まり、「むがし 語いやれ」と昔話をねだつたものです。しかし、昼間昔話をねだると「昼間むがし語つと、ネズミが小便たれる」と言つて語つてもらえませんでした。

只見町の昔話の語りが見直されたのは、「夕二ばあちゃん」として親しまれた故馬場夕二さんの功績があります。自ら語り伝えてきた昔話を自らの手で執筆し出版し、また、山形県南陽市で開催された語りの会で只見町の昔話を語るなど、只見町の昔話の素晴らしさを世に知らしめたのです。『夕二ばあちゃん』のざつとむかし』には、25話の昔話が収録されています。一人でこれほど多くの昔話を伝承していたこと自体珍しいものでした。その上、只見町の方言で

語る慈愛に満ちた語り口調は、思わず昔話に引き込まれ、子供ならずとも「まつと、語いやれ」と言いたくなるほどでした。

只見町には、50とも60とも知れない多くの昔話が伝承されてきました。なかでも「サルとカオスの魚釣り」「サルとビツキの餅競争」「古屋のむる」「三枚のお札」「サル婿入り」「だんごむかし」「鳥呑みじい」「笠地蔵」などは、好まれたようです。

昔話は、いつ、誰が創作したのかわかりません。しかし長い間語り継がれてきたのは、時代を越えて人々の心を打つものがあつたからです。これからも只見町の昔話を只見の言葉で語り継いで行って欲しいものです。只見町の文化の継承ばかりでなく、健やかな子供たちを育てるためにも願う次第です。

只見町の民俗を6回に渡つて紹介してきましたが、改めて只見町の民俗の素晴らしさを感じます。これは只見町のかげがえのない財産であり、誇れるものであります。このことをお忘れなく、よりよい町作りをされることを遠方より願っています。